



独立行政法人 国立病院機構

四国こどもとおとなの 医療センター

アートプロジェクト Topics

—今月のショット—

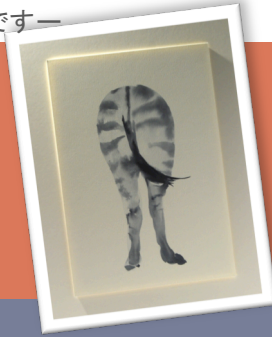
成育エントランスの中央から、天井に向かってまっすぐに伸びるからくり時計。名前は「このき」川嶋守彦さんの作品です。音楽は青木隼人さんが担当。二人とも子どものようなビュアな感覚を持った大人です。



2014年 2月号

—院内の小さな声から—

手術室の壁画プロジェクトが進んでいます。現場の医師や看護師さんとの話し合いの中で、「恐怖感や不安感を取り除いてあげたい。」という声と、「待っている家族の気持ちがふさがらないように。」という声がありました。「キャラクターよりも風景画の方がいいかな・・・」という声も。プロジェクトを進めるときに私が最も大切になっているのは現場の方々の声です。語られた内容もそうですが、その声の大きさや、声その「場」に響いたときの空気感も。声にはたくさんの情報が含まれています。その声を踏まえて、今回は「手術室の窓」というタイトルで、手術室の待ち合いに風景画を描く事になりました。作家は善通寺出身のイラストレーターで東京在住の島田玲子さん。窓枠の向こうにあるのは馴染みのある善通寺の風景。オリーブやみかんの木。葉っぱの妖精が手術の成功を祈っています。—そこに想いがあれば必ず何らかのかたちで現れてくるものです—



からくり時計「このき」

2年前、新病院建設にアートプロジェクトを導入しようという話を持ち上がったとき、一番始めに要望としてあがったのが「からくり時計」でした。その時、医療スタッフの皆さんはどんな「からくり時計」を想像していたのでしょうか。定刻になると鳩が飛び出してぼっぼと鳴くタイプのもの？それとも、カラフルなキャラクターたちが音楽にあわせて踊り出すもの？きっと、今、こうしてエントランスにあるからくり時計「このき」ではなかったと思います。想像の世界にあるものを現実の世界に引っ張りだしてくるのは簡単なことではありません。「このき」が完成するまでに、安全性・コスト面・建築基準法・消防法。その都度モデルチェンジしながら「このき」はいくつものハードルを飛び越えてきました。作者の川嶋守彦さんは、海外出張に向かう空港からデザイン変更のラフスケッチを送ってくれたこともありました。子どものように柔軟な感覚を持った川嶋さんだから飛び越えられたのだと感謝しています。想像の世界は無限に広くどこまでも自由です。子どもを「ごまかす」ためのからくり時計ではなく、子どもの持つ想像力を刺激し、生命力をアップさせるためのからくり時計をつくろう！たといえ体は思うように動かなくても、想像の世界はいつでも自由に飛び回れるのだ。ということを伝えられるようなものにしよう！その想いを設計士さんや施工業者さんと共有して、それぞれができるベストを尽くした結果、現実の世界に「このき」を出現させることができました。「このき」の前を通ると「何これ？」という声が聞こえてきます。そう。それが『想像の旅』のスタート！待っている時間も豊かなものでありますように・・・

今月の一枚

作家:野村 嘉代

大人も子どももひとと動物も、生きているということにおいて、みんな同じ重さでそこに存在しているということ。“me”というタイトルにはそんな意味を込めました。